

学習院アーカイブズ ニューズレター

06

Gakushuin Archives Newsletter 2015.7.22 vol.



輔仁会文化祭での体操演技（1957（昭和32）年11月）

現在中央教育研究棟が建つ南1号館前には、1960（昭和35）年に中央教室（ピラミッド校舎）が建設されるまで「中央グラウンド」がひろがっていた。1957年の学習院輔仁会文化祭では、その年に全日本選手権を制した東京教育大学チームによる体操の演技が披露され、多くの観客を集めた。

Contents

学校資料保存の普及をめざして 芳賀町総合情報館	富田 健司 …………… 2
学習院沼津游泳会史 沼津游泳会 顧問・元代表	池田 賢司…………… 4
史料紹介—安倍院長の辞職未遂—	桑尾光太郎 …………… 6
主な活動（2015年2月～6月）	…………… 8

学校資料保存の普及をめざして



芳賀町総合情報館 富田 健司

1. 芳賀町総合情報館について

まず、私事から始めることを御寛恕願いたい。筆者は、1996年、学習院大学文学部史学科に入学し、日本近世史を学んだ。その一方、大学1年時に受講した総合基礎科目「記録保存と現代」に強く影響を受けたことがきっかけで、アーカイブズの世界に飛び込み、現在、芳賀町総合情報館（以下「情報館」）でアーカイブズの業務に携わっている。学習院大学は日本のアーカイブズ界を様々なかたちでリードしてきたが、なかでも、アーカイブズ教育の先鞭的役割を果たしてきた講義が「記録保存と現代」である。そして、その縁が現在まで続き、今度、本紙への執筆依頼を頂戴したことに感慨深いものを感じている。

さて、小稿では、情報館での学校資料への取り組みとそこから派生した学校資料教育の一端について報告し、学校資料保存の議論に刺激を与えられれば幸いである。

芳賀町は、栃木県宇都宮市の東部に隣接した人口16万人、米・梨・イチゴといった農業特産品をもつ農業地域と、本田技術研究所を中心とする芳賀工業団地のある小規模自治体である。その長閑な田園風景が広がる中に、2008年10月、図書館、博物館、文書館の3つの機能をもつ複合施設、情報館が開館した。

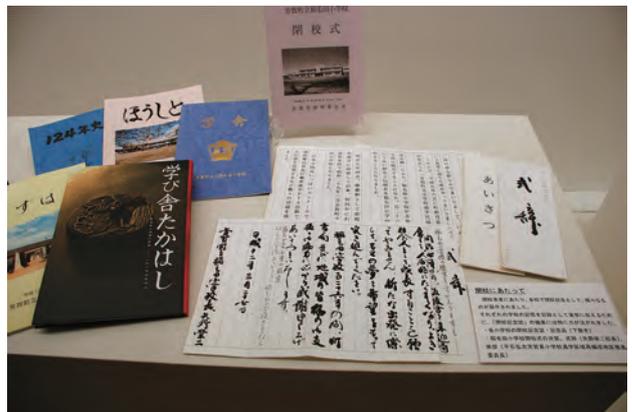
情報館整備計画は2003年度から始まった。町立図書館が未整備だったこと、芳賀町史編さん事業の完了に伴い検討され始めた文書館整備構想、郷土資料館に収蔵されていた美術・民具・考古資料の活用、自治体規模に見合った機能の複合化等を背景とし、最終的に3つの機能を一つの建物に集約した施設となった。特に、文書館機能は芳賀町編さん資料の引継、芳賀町の旧町村文書、学校資料等の保存公開を行うとともに、町の文化的、歴史的事項に関わるレファレンスを中核的業務に位置付けている。以下では、学校資料に焦点をあてて述べていきたい。

2. 芳賀町における学校資料保存

「学校資料」とは何か。現時点での学術的定義は見

当たらないので、ここでは筆者の経験に基づいて整理しておく。「学校資料」とは、学校沿革誌、学校日誌、学籍簿、指導要録、学校経営要覧、校歌・校章・校旗の制定記録といった文書類、周年記念誌、学校だより、PTAだより、卒業アルバム、教科書、卒業生や学区関係者から寄贈された美術品や記念品、児童・生徒の作品、校地に設置された記念碑、写真、映像記録等およそ学校経営において作成あるいは収集された資料の総体をいう。資料の性格としては、記録資料とモノ資料の大きく2つに分けられ、その物量的比率は7対3で記録資料の比率が高いと思われる。したがって、学校の文書管理のあり方が、学校アーカイブズ、そして、最終的にそれを包括する学校資料全体の質を規定するのではないかと考えている。

芳賀町では、1997年度から2005年度にかけて、明治期開校の流れを汲む小学校9校の統廃合が漸次進められ、最終的に3校となった。それと期を同じくして、芳賀町史編さん事業、情報館の開館準備が行われてきた。その過程で、担当者が学校資料の散逸防止と将来的な活用を想定して、学校資料を収集してきた。その後、情報館開館後に資料の整理、評価選別作業を行った。そして、2014年夏、9校の歴史を写真や文書で紹介する企画展「わが町学校のあゆみ－小学校編－」を開催し、観覧した住民の方が学校写真の



学校資料の展示風景－閉校式の式辞と閉校記念の刊行物－

利用を希望する等もあり、学校資料の提供も少しずつ始めている。

3. 学校資料についての講義を行って

さて筆者は、2014年冬、宇都宮大学教育学部高山慶子先生の依頼を受け、一つの講義(授業科目「社会」)を担当した。この授業は、社会学、倫理学、歴史学、地理学、国際理解の5分野にわたるオムニバス方式で、小中学校教員志望の学生を対象とし、社会科を教えるための基礎教養を提供するために設けられたものである。そのうちの歴史学では日本史の資料について講義が行われてきたが、資料が保存活用される現場、アーカイブズに関する話題を提供して欲しいとの要望が筆者にあった。そして、教育学部生が対象で、タイミングよく学校資料の整理と展示を行ったこともあり、これを講義の素材とすることに決めた。講義名は「アーカイブズとは何かー学校に残されてきた資料を通じて考えるー」、筋立は①アーカイブズとは何か②公文書館について③学校文書管理からアーカイブズの保存へ④学校統廃合とアーカイブズ⑤学校アーカイブズを残して⑥まとめ⑦スライドによる学校アーカイブズの紹介、という7構成である。

この講義を行うにあたり、幾つかのことを意識した。一点目は、先天的にアーカイブズは存在しないということ。組織が存在し、そこで様々な活動が行われ、その下で様々な文書・記録が作成される。そして、それらの適切な管理を前提としてアーカイブズが生まれることを強調した。二点目は、学校アーカイブズがクローズアップされる場面を考えて。すなわち、学校統廃合である。学校統廃合はアーカイブズ滅失の大きなきっかけとなる。文部科学省の「廃校施設活用状況実態調査」(2014年5月)によると、2002年度から2013年度の公立学校(小・中・高)の廃校数は5,801校を数える。少子化をはじめとする様々な要因によって加速度的に学校統廃合が進行している。将来、教員をめざす学生が現場に出た時、勤務校の統廃合を目の当たりにする可能性は決して低くない。その時に、この講義を少しでも思い出し、学校の記憶を残す役割も担って欲しい、そんな願いを講義に込めた。

講義時間の90分では語り尽くすことが難しく、果たして理解して貰えるのか、不安が大きかった。だが、講義後に書いて貰った67名の感想カードを拝読し、それは一蹴された。ここで、学生の感想を少し紹介したい。なお、掲載にあたっては、前後を省略する等一部加工したものもある。

- 「教員になり、職場となった学校の過去に触れる時に思い出したいと思いました。」
- 「アーカイブズと聞くとどうしても歴史研究のイメージが強かったです。でも、学校の様な組織においても多様なアーカイブズが存在するという事を知って驚きました。知ったというか、初めてそういう意識を持って学校を見てみました。」
- 「アーカイブズの中には学校と深く関わる記録が含まれている事に気付く、教員となる可能性がある私達が史料を大切に保管し、学校が存続している間だけでなく、廃校を迎えてしまった後でも、記録が残るようにすべきだと感じた。」
- 「学校では思った以上に多くのことを記録していることが分かり、自分が教員になった時にはどれだけの情報が学校内にあるのか、その学校のことを知るためにも見てみようと思いました。」
- 「学校の昔の文書の保存を通して、学校はその地域と密接につながっているということがわかりました。学校の統廃合は、その学校に通っている児童・生徒だけの問題ではなく、地域全体の問題であると改めて思いました。」

教育学部の学生だけあって、多くの学生が子供たち、学校、教育そのものに対して強い関心を持っている。そこに、学校資料の話題を提供したことで、学生の現状認識に新たな視点を提供できたのではないかと思っている。また、母校が廃校になったと記された感想があり、学校統廃合についてよりリアルティをもって受け止めてくれた学生も少なくなかった。学校資料保存は、教育史や学校の歴史を語るためだけではなく、地域住民のアイデンティティに直結する極めて重要な課題である。だが、現実には、多忙感の強い学校教職員の中に学校資料保存の意識を醸成することは極めて難しい。とすれば、教員志望の若い人達に普及のベクトルを向けてもよいのではないかと、講義を終えた今、その考えを強く抱いている。

今回の講義では、資料整理等の実務的手解きを解説するには到底至っておらず、学校資料に関心を持ってもらうほんの入口に過ぎないかもしれない。しかし、一人でも多くの若い人達に、このような世界があることを理解してもらい、ささやかな試みかもしれないが、学校資料の収集ー整理ー公開といった現場体験そのものの普及を、資料保存の裾野を広げるために、これからも続けていきたいと思う。

学習院沼津游泳会史

沼津游泳会 顧問・元代表 池田 賢司

「学習院沼津游泳会」とは、現在、中等科、女子中等科、初等科が毎年、夏に静岡県沼津市の島郷海岸で実施している游泳訓練における游泳助手の集まりです。皆、初等科、中等科、高等科、女子中・高等科在学中には生徒・児童として、男子は「ふんどし」を締め、女子は水着の上に「さらし」を巻いて、游泳に参加した後、それぞれの高等科助手として経験を積んだ者の中から選出された、大学生以上で組織されている任意団体です。

「沼津游泳会」の名称が公に出たのは昭和43(1968)年秋でした。

学習院が沼津の地に寮を開設し、その海岸で游泳訓練が始まったのは大正2(1913)年からですが、この当時から戦前までの游泳訓練における助手は、高等科の上級生や卒業生に加えて、熊本から手伝いに来た小堀流踏水術の第七代目小堀平七師範の門弟が務めていました。

その後、第二次大戦後に各科で順次復活した沼津游泳訓練における助手は、高等科・女子高等科の沼津游泳訓練の上級班において訓練を受けた者の中から、助手として相応しい男女両高等科上級生、大学生、卒業生を、各科の体育の先生方が個別に探し集めて任命していました。この頃の助手は主に現役の水泳部員や元水泳部員が多く、その他には運動部、文化部、他大学への進学者、院生、若手の社会人等が若干加わった、所謂、寄り合い所帯で構成されていました。しかしながら、年ごとに曜日の兼ね合いにより、休日・有給休暇等を充てていた社会人や、部活動日程の調整をしていた大学生は、参加が困難な年度も出てきました。他方で、東京オリンピック後に普及したスイミングクラブに通って泳力向上が進み、上級班に所属する生徒・児童の数も多くなるに連れて、助手の泳力・技術力・指導力の不足感がみられるようになりました。

そのように年々変化して行く游泳訓練環境・状況に対応すべく、昭和43年に当時の大学生有志が集まり、学校側への安定的な助手の確保協力、助手としての泳力・技術力・指導力の向上を目指し、任意団



沼津游泳会発足前年の助手達(昭和42年)

体として「学習院沼津游泳会」が組織されたのです。

発足当時は認知度も低く、多様な部活動に所属する者や他大学進学者など多い寄せ集めの団体であった事もあり、各科の体育の先生方以外には本会の存在を良くご存知無い方もいらっしゃいました。また、当然の事ながら練習会場に院内の何処のプールも使用出来ず、当時の総武線千駄ヶ谷駅前にあった東京都体育館のプールで練習する日々でした。

このような状況が暫く続いた後に大きな転換期が訪れたのは平成になってからでした。平成元(1989)年には高等科行事期間中に伊豆半島沖地震が発生し、急遽行事を中止して生徒、教職員、助手の全員が帰京しましたが、後日、当時の助手有志を募り、後片付け作業等を請け負いました。

平成2(1990)年には駿河湾津波対策の年次計画により、牛臥から静浦にかけての防潮堤が寮の前の海岸を最後の工事場所として全て完成しました。これにより、行事開始前の事前準備作業の折に脚立・和船等を寮内から海岸へ搬出することは、人手のみでは困難となり、クレーン車の補助が必要となりました。

平成3(1991)年、それ以前の沼津游泳行事は、高等科が7月の第一学期終業式前に実施していたことと生徒の体力的・人数的な確保の必要性もあり、事前準備は全て高等科で行っていました。しかし、平成2年を最後に高等科が諸般の事情により行事を

中止することになり、この事前準備作業を初等科・中等科・女子中等科で行うには日程調整の必要性および危険性も伴うため、地元の団体・業者を探しましたが、これもうまく見つかりませんでした。このような状況下で游泳会の有志による請負作業案が浮上し、各科・法人各部と調整のうえ、一回目の作業を行うことになったといういきさつがあります。

当初は30名程度の会員で行っていましたが、その後、大学学年暦の変更により学期末試験の時期と重複して大学生の参加が減少したり、年々助手の高齢化とともに家庭を持つようになり、母校の手伝いとは言え夏の休日を潰すことに対して家族の理解が得難い状況となってきました。このため、家族連れでの参加も承認することとして卒業生にも手伝いを願うことにしたところ、父親・母親が複数の家族で複数の子供の面倒を補い合う形も生まれました。

また、後輩・母校のために休日作業を行っているところを家族に見学してもらい、子供達にも、プールではなく自然の水に接して水に対する楽しさや怖さを体験させるという教育的効果も理解されるようになってきました。その結果、家族での参加も合わせて100名を越す年も出来ました。

また、各科とも6泊7日であった行事期間も、順次4泊5日へと短縮され、游泳行事期間内に更に効率良く・安全に過ごす事の重要性が増してきました。その他、游泳訓練の助手としての手伝いをする傍ら、行事の期間中に台風が接近した折には、和船の引き上げ固定作業や脚立の倒壊防止作業を行い、また脚立・杭・ブイ等が流された際には、復旧作業を速やかに行うなど、昼夜を問わず関わって参りました。



事前準備作業風景

このように各科沼津游泳行事等における游泳会の必要性が増すにつれて学校側からの認知度も上がり、今では各科行事に大学生・社会人が部活動の合間や家族の理解を得て休みを取り参加しています。毎年早い時期に各業務のスケジュール調整を行い、事前準備作業に60名ほど、各科行事に30～40名ほどが参加しており、最近その中には、ご自身も沼津游泳会員でいらした故高円宮殿下の三女絢子女王も参加されています。

また一方、泳力・技術力向上のための練習会場として、夜間に中・高等科および女子中・高等科プールの使用も許可されるようになり、シーズンオフには定期的に練習に励んでいます。

なお、近年は父母会からの助成金も頂戴して、中等科行事に参加する高等科生の助手を行事前日の朝に先発要員として出発させ、脚立入れ・和船搬出・杭打ち等の事前準備の実体験および和船の漕艇訓練をするとともに、後輩へ作業内容を順次継承して行く事も試んでいます。

平成11(1999)年からは、6月・7月の土曜日午後学習院生涯学習センター主催で行っている初等科6年生対象の泳法教室も始まり、主に沼津游泳訓練に向けた隊列游、立游、横游ぎ、飛び込み等の游



事前準備時の集合写真(平成13年)

泳指導を游泳会で請け負っており、既に16年が経過して、最近では毎年50名を超す受講生が参加しています。

以上、沼津游泳会の発足から今までの経過をお話しして参りました。今後の課題としては、高等科の沼津游泳行事が中止になってから20数年が経過し、また各科が学年行事ではなく希望者参加の行事として、日程も6泊7日から3泊4日・4泊5日へと変更になり、海での游泳訓練、和船の漕艇訓練の時間減少も併せて助手の新規育成・養成が思うように進まないことです。高齢助手に手伝いを頼らざるを得ず、将来を担う若手助手の育成が十分整っていないことが悩みの種となっています。

最後になりましたが、学習院の游泳訓練は明治13(1880)年、隅田川両国の中洲で始まり、片瀬游泳場を経て、現在は沼津市島郷の游泳場で行われています。現在もその游泳訓練の基本となる日本泳法小堀流踏水術の游ぎは次のとおり継承され、毎年各科游泳行事の助手を務めるとともに、事前準備・後片付け作業等に参加していることを付け加えさせていただきます。

小堀流踏水術の相伝授与者4名、日本水泳連盟認定の日本泳法資格者として、範士2名、教士2名、練士2名、游士7名。

なお、学習院と日本泳法小堀流踏水術の関係につきましては、また別の機会がありましたらその折に述べさせていただきます。



左から「腰水の巻」・「踏水の巻」・「目録」

小堀流踏水術

小堀流は村岡伊太夫政文を祖とし、「手操游」^{たぐりあそび}を基本とした1700年頃から伝わる日本泳法。小堀流では潜泳の泳法以外は、すべての泳法に「游」という字があてられ、これには水の上を泳ぐという意味がある。小堀流踏水術はもともと川游ぎの流派であり、深い川や海で相対して戦闘ができるように立游を基本として、地を踏むように水を踏むところから「踏水術」と名付けられた。

学習院の場合、「手操游」の泳法について、七代目師範の小堀平七が「長時間団体で遊ぶことが出来るように」と、本来あおり足であったものを、疲労感の少ない両踏み足の平游ぎにすると決めて、以来現在の泳法を指導している。

史料紹介—安倍院長の辞職未遂—

桑尾 光太郎

1947(昭和22)年、私立学校として再出発を果たした学習院は、厳しい財政難に直面した。安倍能成院長は状況の打開のため、寄付の募集をはじめ資金の確保に奔走したが、安倍をしても辛い日々が続いたようで、翌1948年に入ると院長を辞職しようとした。安倍の『戦後の自叙伝』(1958年)によれば、院長の後任を天野貞祐に依頼し、天野からも内諾を得ていたという。

しかし学習院の教員にとって、安倍の辞意表明は衝撃だった。学習院高等科(旧制)科長をつとめていた櫻井和市教授(のち院長)は、後年次のように回想している。

二十三年三月十九日、晴天のへきれきのようなこ

とが起つた。(略)突如安倍先生は院長をやめたいと宣言されたのだつた。国立博物館長の方に専念したいと言われた。当時は学習院長を兼任されていたのである。驚いた私は二十日の晩、鍋島能弘君などと官舎に院長をお訪ねして翻意をお願いした。院長が考えてみようと言われて、まずまずほつとしたことだつた。たまたまお酒が少々はいつていたらしくいつものいかめしい顔ではなくご機嫌がよかつたのは幸だつた。この年は二十九日に卒業式があり、両陛下がおいでになることになつていて、その予行演習が二十三日午後戸山町女子部で行われた。そのあと、各科長、理事だつた井上教授などと二階の院長室に安倍先生をとり囲み、みんなで再び、博物館の方をやめて学習院に専念していただきたいと懇請

したのだつた。その意気込みは白鉢巻をして坐込みでもやり兼ねない有様だつた。安倍先生はこの熱心を諒とされたのだらうと思つている（『私学誕生当時十周年を迎えて』『学習院新聞』1957年10月7日）。

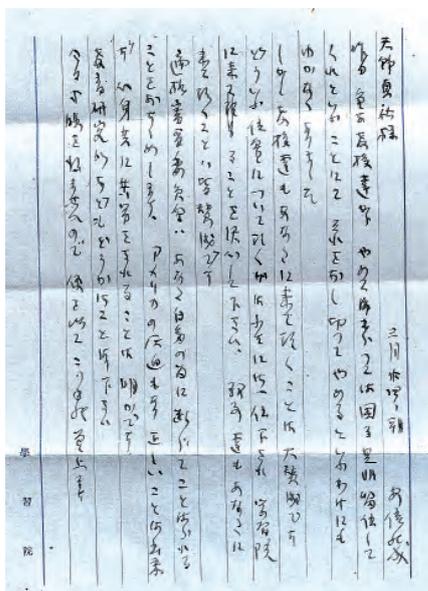


安倍能成（1948年）

櫻井とともに安倍を取り囲んで残留を懇請した児玉幸多大学名誉教授（当時中等科長）から筆者がうかがったところによれば、「安倍さんが博物館長を辞めても博物館はつぶれないが、院長を辞めたら学習院はつぶれてしまう。だから残ってくれ」と説得したとのことだった。その翌朝、安倍が天野貞祐に宛てた

書簡が獨協学園史資料センターに保存されており、次のように記されている。

天野貞祐様 三月廿四日朝 安倍能成
昨日主な教授達からやめてもらつては困る是非留任してくれといふことにて、それをおし切つてやめるといふわけにもゆかなくなりました。
しかし教授達もあなたに来て頂くことは大賛成です。どういふ位置について頂くかは少生に御一任下され学習院に来ることを決心して下さい。理事達もあなたに来て頂くことは皆賛成です。（後略）



その後、安倍が1966（昭和41）年の死去まで学

習院の復興と発展に全力を尽くしたことはいうまでもない。天野貞祐も学習院教授として迎えられ、1950（昭和25）年に文部大臣に就任するまで学習院大学の設置準備や初期の大学運営にあたって安倍を支えた。院長辞職を撤回するまでの一件について、安倍自身が次のように記している。

木から落ちた猿のやうな学習院をやつてゆく苦勞は、博物館の比ではない。（略）博物館の仕事は多少でも発展の見込がたしかだが、学習院はどうなるかも分らない。私は振子のやうにいくたびかあつちにふれたりこつちにふれたりして、一度は天野君を学習院に頼んで博物館に居すはるといふ決心を宣言した後、また天野君に学習院の経営を託することの気の毒さを思ひ、自分の難を棄てて易に就かうとする心持を肯定しかねて、最後にまた学習院に落ちつくことになつた。私のこのふらふらした態度に対する非難は私の甘んじて受けねばならぬ所である。（略）かうして私は今学習院に専心することになつた。私がかういふ決心をしなければならなくなつたのは、ただ私が山梨前院長に説き伏せられて一言それを承知したからである。私は長い間この承諾を『一期の不覚』として悔やんだ。今でもくたびれた心身を励まして寄附をもらひにゆかねばならぬ時などには、この悔を新たにすることもある（『学習院と博物館』『東京日日新聞』1949年2月21日、『私の歩み』所収）。

この文章が発表されたのは、新制学習院大学が1949（昭和24）年2月11日付で開設認可を得て、学生募集を始めようとしていた矢先である。まさに私立学習院の浮沈がかかる正念場を迎えていた時期に、安倍は一度は辞職しようとしたことを明らかにして「私のこのふらふらした態度」を自己批判し、さらに院長を引き受けたことを後悔している。「正直第一」をモットーとする安倍ならではであろうが、なんとも正直過ぎるのである。

2016（平成28）年、学習院大学は52年ぶりの新学部となる国際社会科学部（仮称）を開設する。とともに、この年は安倍能成没後50周年にあたる。学習院アーカイブズは愛媛県生涯学習センターが所蔵する安倍能成関係資料の調査および撮影作業を進めており、また卒業生等からのゆかりの資料の寄贈も多い。安倍の関係資料に接しながら戦後学習院の初心を思い返すことは、これからの学習院の指針を見定めるためにも欠かせない作業であろう。

（学習院アーカイブズ職員）

主な活動 (2015年2月～6月)

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新 (平成26年度作成文書ファイルの追加、平成15年度以降作成文書ファイルの遡及入力)の継続
- ②西5号館地下倉庫の文書ファイル等の仮目録および評価選別案作成の継続 (平成14年度以前の文書ファイルを対象として)

◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①宮内庁公文書館所蔵学習院関係文書の調査・デジタル化 (継続)
- ②女子部史料室所蔵資料の選別・整理 (継続)
- ③女子大学所蔵写真の整理・目録作成

◆史資料のデジタル化・修復

- ①二葉保育園所蔵、野口ゆか関係古写真のデジタル化 (～2月)



二葉保育園所蔵 学習院女子部幼稚園保育満了児 (大正6年)

- ②学習院大学卒業アルバム (昭和27年～38年)のデジタル化
- ③アーカイブズ所蔵旧学習院公文書「重要雑録」「公文引継書類」他のマイクロ撮影・デジタル化
- ④理事会・評議員会関係資料のマイクロ撮影及びデジタル化 (総務課と共同、5月～)

◆史資料の受贈・購入

- ①昭和初期沼津游泳・初等科運動会・女子学習院運動会映像 (2月)
- ②昭和戦前期高等科学生写真帖 (3月)

資料提供のお願い

学習院の歴史を示す書類・写真・印刷物などをお持ちでしたら、ご教示くださいますようお願い申し上げます。クラブ活動やゼミ活動・文化祭の記録、写真、時間割、記念品、映像フィルム等々、在学・在職時代の思い出の品々が貴重な歴史資料となります。

- ③乃木希典院長扁額「建志」(4月)



◆講演会・教育支援・広報支援等

- ①女子部教員向け講演「アーカイブズからわかる学習院の女子教育」(2月19日)
- ②各科初任者教員研修「学習院の教育と歴史」講師 (4月15日)
- ③目白駅美化同好会総会講演「目白のまちと学習院」(5月13日)
- ④幼稚園父母講座「資料と写真からみる学習院の歴史」講師 (5月21日)
- ⑤大学文学部教育学科専門科目「学校アーカイブズ論」での所蔵資料紹介 (6月16日)
- ⑥BS ジャパン「皇室の窓スペシャル」学内撮影協力、写真提供 (3～4月)
- ⑦目白駅開業130周年記念資料展への協力 (1～2月)



目白駅構内での展示風景

◆その他

- ①全国大学史資料協議会東日本部会への参加、武蔵野美術大学 (3月)・明治大学 (4月)・早稲田大学 (6月)

学習院アーカイブズ・ニュースレター第6号
2015 (平成27)年7月22日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-3986-0221 (内線2531、2551)
事務室 西5号館(本部棟)地下1階
<http://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>